

姥堂小学校だより

平成29年度 第22号 平成30年2月2日(金) 発行責任者：遠藤幸栄



先週末から1年生を中心に流行を見せたインフルエンザ、今日現在、A型に1年生に1名、3年生に1名罹患しているものの、大分落ち着きを取り戻してきました。このまま終息に向かうよう、学校では次の点を繰り返し呼びかけています。

- ① マスクの着用
- ② こまめな手洗い、お茶うがい、水分補給
- ③ 休み時間ごとの換気、加湿器の使用
- ④ 休日も、人混み、不要な外出を避ける
- ⑤ 長袖の下着を着用、上着も大事
- ⑥ 十分な睡眠とバランスの良い食事を！



『うるささに感謝』 ※ 耶麻地区作文コンクール特選作品より



5年 S.T

「千音、もうゲームやめなさい。」

私はゲームが大好きで、つい夢中になり、やり過ぎることがある。そんな時は、必ず両親にしかられる。何度も注意されると両親をうるさいと思うこともある。でも、そのうるささが感謝の気持ちに変わった大きな出来事があった。それは私の家に、もう一つの命が生まれたことだ。

去年の七月、学校から家にもどってしばらくすると、

「生まれたよ。」

と、父から一本の電話が入った。予定よりも四日くらい早い。私は少し混乱した。その状態のまま、私はもどった父の車に乗って病院へ向かった。病室に入ると笑顔で母がむかえてくれた。母はとても落ち着いた声で、

「赤ちゃん、見てきたら。」

と言った。静かなろう下を私は父と兄、弟といっしょに新生児室に向かった。中には入れないので、私たちはガラス越しに赤ちゃんを探した。三人並んでいるうちの真ん中だと父が教えてくれた。

「小さいね。」

と、私はささくように言った。

「小さい。なんか赤いね、顔。」

と、弟は私に合わせるように、小さい声で言った。四人でしばらくながめた後、私たちは病室にもどった。名前は「大世（だいせ）」。父の提案に、母が賛成して決まった。この時の両親の幸せそうな顔が、私は今でも忘れられない。私の名前を決めるときも、こんな顔だったのかもしれないと思った。



次の日も病院へ行った。大世をだっこできる日なので、私はわくわくしていた。病室に入ると、母が大世をだっこしていた。

「千音もだっこする。」

と聞いてきたので、私はすぐにだっこさせてもらった。小さくてこわれそう。やっぱり赤い。何よりいいにおいがした。だっこしていると、「大切にしなきゃ」とか「ちゃんと面どうを見なきゃ」という母親のような気持ちが私の中にわいてきた。とても自然にわいてきたことが本当に不思議だった。

その日からもう一年。大世は一歳で、歩くこともできる。たくさん食べて、たくさん寝てすくすくと育っている。私は大世の遊び相手楽しい毎日だが、父と母はミルクをあげたりねかしつけたりと大変そうだ。ミルクをあげようとしてもぐずって飲まなかったり、寝かそうとしても元気があって寝なかったりすると、父も母も困ったような表情になってくる。そのたびに「私だったら、怒りそうだな。」と考えてしまう。でも両親は決して怒らず、やさしくあやしている。私もこんなに困らせていたのだらうと、申し訳ない気持ちになった。

そんなある日、いつも通り大世と遊んでいた時のことだ。母は私に、

「いつもありがとう、千音。助かるよ。」

と言ってきた。ただ遊んでいただけなのに、なぜお礼を言われたのかが不思議で、

「何で。」

と聞いた。母は、

「おかげで時間ができるんだよ。」

と答えた。確かに、私が大世と遊んでいる間は、父や母は料理をしたり昼寝をして休んだりしている。何気なくしていたことが、両親を助けていたということを知ったしゅん間、私はとてもうれしくなった。

それからは「遊ぶ」というより「面どうを見る」という気持ちに変わった。「絶対けがさせられない」という責任感まで感じるようになり、私は少しきびしく接するようになった。大世がおもちゃを口にしたりした時は、

「食べちゃだめだよ。」

と言って取り上げたり、げん関など危ないところに歩いて行こうとする大世を

「あぶないでしょ。」

と言いながら、無理やりだっこして連れ戻したりする。思い通りにいかない大世は、大声で泣いてしまう。私は大世にとってうるさい姉になっているのかもしれない。それでも、大世をけがさせたくないという思いで、ついうるさくってしまうのだ。

大世の世話を通し、私は一年前の自分の姿を思い出した。ゲームのやり過ぎで両親に注意されていた自分だ。何度も注意してくるのは、両親が私を心配してくれていたということなのだ気づかされた。もし心配してくれる人が私の周りにいなくなったら、私はどうになってしまうのだろう。何でも思い通りになってわがままな人間になり、最後にはひとりぼっちになるような気がしてこわくなる。だから、うるさく注意されることは、本当はありがたいことなんだと心の底から思う。これからは私は大世にうるさく言い続ける。

「だめでしょ。」

と、心配の気持ちをこめて。

